

かゝる句どもの見ゆれば、昔は此枕箆筒いづれの家にも有し物なるべし又、

江戸筏享保元年刻

前句略  
十人前ぞ枕いやしき

青峩

といふ吟あるにて思ふに、享保の頃ははや梁枕おこなはれ、箱枕は廢たるにやあらん、又曰、河念元祿十年刻に、枕だんす次きせる、伊勢骨柳イセコナに何かうちいれとあるは、旅の用意にて、枕近くおく、箆筒の事なり、手近くおくを、手箆筒といふに同、

枕雜載

〔半陶藁〕高枕表號說代桃源師

枕之爲用也、具于安寢爾、而其用不一矣、用之文者、司馬警枕焉、用之武者、錢王警枕焉、真而用之、列衣鉢辨道之器、俗而用之、寄閨房相思之情、是皆用之小者也、黥布出下計、則漢高高枕而臥、商皓輔東宮、則留侯高枕而臥、是枕之適天下國家之用、用之大者也、東濃持是主盟、就余求號號之設也、在表其德、余乃以高枕兩字命焉、有規有祝、有規祝之外者、曰所以規者何、曰古之人養生者、不高其枕、率始高之、而漸低之、故以紙爲枕、而日減一番、頤神妙術也、蓋服藥百裹、不如一宵低枕、而今命以高枕、所以規者不在斯哉、曰所以祝者何、曰公真俗之語、永泯其相、紅幢翠節、出擁萬騎、則高吳越王枕、以警其眠、碧紗青燈、入讀群書、則高獨樂公枕、以警其眠、然後一家一國如漢高晉侯高枕之日、而延及天下、所以祝者不在斯哉、中略枕也者、誠公家舊物也、抑公鈞天之想、遊仙之夢、所寓果安在乎、杜詩曰、高枕遠江聲、遠江聲是其所寓云、則向所謂規祝之外者、余所不知也、一笑、

〔本朝文鑑記〕枕記

貞室

敷妙の枕は床臺の臥具にして、老少男女のゐをやすからしめ、勢をたすけ閑をそふる寶器なれど、人つねに目なれて此德の本ゐをしらす、もろこしの人も是をいみじと思へるにや、香木をもてけだもの、形をさざみ、玉をみがき、玳瑁をのべて、あしき夢をもさき侍る、此國の歌人のよみ